

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18402042
 研究課題名（和文） お金という文化的道具の修得と東アジアの子どもの生活世界：差の文化心理学の視角から
 研究課題名（英文） Mastering Money as Cultural Tool and Life-World of East Asian Children: From the perspective of “Cultural psychology of difference”
 研究代表者
 山本 登志哉（YAMAMOTO Toshiya）
 早稲田大学・人間科学学術院・教授
 研究者番号：60221660

研究成果の概要（和文）：本研究では比較文化心理学と文化心理学の視点の統合を企図しつつ、また市場分析にとどまる狭義の経済学を越えて経済人類学などの視点を取り込みながら、お金を単なる経済的道具としてではなく、それぞれの文脈（社会・時代・場面など）によって意味づけの異なる文化的道具として理論的に把握した。そしてその文化的意味づけの構造、お金を媒介に形成される子どもの生活世界の構造と発達の変化を、日中韓越の異なる文化背景を持つ研究者間の対話的研究によって明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research, intending to integrate the theoretical viewpoints of cross-cultural psychology and cultural psychology, and also intending to expand the notion of economy of modern economics, which is analyzed only within the market economy, to the notion of human economy of anthropology, we have conceptualized the notion of money not as the simple economical tool, but as the cultural tool, the meanings. Those meanings have huge variety depending on individual contexts including society, age, situation etc. Based on this theoretical viewpoint, we have investigated the structure of cultural meanings of money, the structure of children's life-world mediated by money, and the developmental change of them. Each research of this project have been executed dialogically by Japanese, Chinese, Korean and Vietnamese researchers who have different cultural background.

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,700,000	0	3,700,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2009年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
総計	13,100,000	2,820,000	15,920,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：お金 東アジアの子ども 文化的道具 生活世界 発達 差の文化心理学

1. 研究開始当初の背景

本プロジェクトに先行する科学研究プロジェクト「お金をめぐる子どもの生活世界の日中韓越比較研究：儒教文化圏の多様性と文

化変容」(基盤研究 B1) で、我々は子どもがお金という文化的道具を修得していく過程を比較文化的に分析するという新しい研究領域を、日韓中越四カ国の研究者と共同して

開拓してきた。またそのための理論的な作業として、心理学における文化概念の再検討を行い、文化心理学と比較文化心理学の問題意識を統合する「差の文化心理学」を構想し、新しい分析ツール（概念）や方法論を模索してきた。その中で以下のような問題が見いだされてきた。

【実証面】インタビューからは第一に、お金という道具の修得内容と過程は文化によって異なるが、その差は市場経済化による個人主義化のレベル差のみからは解釈不能なことが見え始めた。たとえば集団主義的關係として考えられる子どもおごりあいは韓国で強く肯定されてそのパターンも多く、日本と著しく対照的だが、ベトナムもさほど積極的ではない。第二に、文化普遍的な両義的關係意識構造をベースに様々な文化差が生ずる、という視点の重要性が明らかになりつつある。たとえば子どもはお小遣いを「親のものではなく自分のもの」と考える方向へ発達するという、日本で一般的な図式が中国では単純に成立しないが、詳細に分析すると「親がくれた私のお金」という両義的關係がいずれの文化でもベースとなり、ウェイトの置き方の構造的な差として文化差が成立していた。次に質問紙の分析からは、まずお金の使い道には市場経済化の程度に応じた一般的な変化パターンが見いだされるが、お金の使い方の善悪判断という意味づけ構造や、自分のお金で買う物の年齢変化パターンは対象地域によって異なり、それは単に市場経済化の結果としては理解不能な、文化的意味づけと文化的自立の問題と考えられる可能性が見いだされ始めた。次にお金の使い方に関する意味づけの発達の時期や発達の方向性が地域によって異なることも見え始めた。

【理論面】我々の方法論が四つの特徴から整理された。1. マルチボイスメソッド 2. 具体的一般化 3. マルチメソッド 4. 個別事例中心化法。

次に文化心理学における Vygotsky や Cole の媒介図式、Wertsch による Bakhtin 理論の取り込み、Engestroem の拡張された三角形の議論を整理しつつ、事例構造の理論的分析ツールとして、「拡張された媒介構造」を提案した。さらに以上の理論的展開全体を元に文化心理学と比較文化心理学の視点を取り込んだ「差の文化心理学」の模索を始めた。また等至点という概念及び等至点に至る複数の経路があることが、文化的発達であるという前提に基づいた複数経路・等至性モデルという新しい方法論によって発達の多様性と文化的価値目標の共有の関係を描く試みも進行中である (Valsiner & Sato 2005 ; サトウ、2009)。

2. 研究の目的

こうした作業を通じ、子どもがお金という文化的道具を実践的に修得し自らの生活世界を生成していく文化歴史的な発達の過程を明らかにするため、まず実証面では以下のような具体的課題が設定された。お小遣いを巡るやりとりを通じた親子關係の文化的発達過程の解明。お小遣いをういた子どもの友達關係の形成・展開と文化的発達過程の解明。お金をういた子どもの生活空間の拡張と生活世界の構成過程の解明。子どものお金の使い方に関する親子の価値観とその家庭・地域・民族などによる差異の解明。

次に理論的な側面から見ると、文化は個人内部の固定的認知構造などには解消されず、しかし個人外部の実体的な集団などにも回収されないという矛盾した性格を持ちながら、固定的なものとしてイメージされつつ常に生成変化の内にあり、解釈者によって多様に現れて一定しないといった捉えがたい性格を本質的に持つため、この矛盾した性格自体を分析の前提にする理論的視座を探り、その下でお金という具体的な現象レベルで記述分析するための方法と分析ツール（概念）を開発することが課題となった。

3. 研究の方法

本プロジェクトは先行プロジェクトで形成した日韓中越の研究者や金銭教育関係者との持続的で安定したネットワークをベースとして展開される。具体的な調査は基本的にそこですでに確立されたスタイルをさらに拡充・整備しつつ踏襲する。各国の各地域で、インタビュー・質問紙・観察を順次展開し、そこで得られたデータについて各国の共同研究者が集まってそこに現れたお金についての文化的意味づけの構造解釈を多声的に展開し、得られた知見の実践的な意味を読み解いていくというのが本プロジェクト展開の基本的な構図である。

主たる調査対象地域は以下である。(大阪 / 東京 / ソウル / チェジュ・北京 / 上海・ハノイ)。

【インタビュー】対象地に沖縄を加える。「国としての日本内部の多様性」を検討する際にも重要な比較対象になりうるからである。

またこれまでのインタビューにおけるインタビューの語りの分析にとどまらず、その語りがインタビュアーとのどのような相互作用によって生成するのか、それがどのように「文化的な語り」として「見いだされ / 生み出され」ていくのかを具体的に分析する作業を行う。

さらに個人内部の語りの揺れの分析を通して、矛盾対立する個人内部や親子間の要求のダイナミックな構造化としてマスターナ

ラティヴが生成していく様相を分析していく。

【質問紙】前プロジェクトでは子どものみを対象にするものであったが、本プロジェクトでは親子をセットとした質問紙調査を行い、両者の意識の共通性やズレの問題、それらの文化的な差異を見いだす。子供用質問紙は前プロジェクトとほぼ同じ内容なので、データの文化的安定性の確認作業ともなる。

質問紙の作成に当たっては日中韓越の研究者が集まって、質問項目の内容や諮問の仕方の文化的意味の理解について、我々のいう多声的な検討を行いつつ行う。またそのデータ解釈についても同様の視点を重視する。

【理論】

前プロジェクトでお金を文化的道具として分析する視点、およびお金を介したコミュニケーションの多重的な媒介構造を拡張された媒介構造の概念を作って捉える、という作業を行ったが、さらにこの概念を用いて「文化差」が「その都度」の相互作用の中で生成していく構造を明らかにする「差の文化心理学」の構想を具体的に展開する。またTEMの概念を用いた文化差の理解の方向性も探る。

4. 研究成果

分析やまとめの作業は現在も進行中で今後も継続し、順次学会発表や論文、書籍の公刊などの形で行う予定である。以下に現時点での概略を示す。

【質問紙】

親子をセットとした質問紙調査の立案、準備、実施、分析、結果の公表を以下のように行い、現在も進行中である。

立案・準備：日中韓越の研究者の協議によって、質問紙調査の立案、準備を行った。子どもを対象とする調査は、主に、お金の使用をめぐる価値観（善悪・許容度）、お金の使用をめぐる他者関係（友だち関係・親子関係）により構成され、親を対象とする調査は、とに加え、お金をめぐる教育観、お金の授与をめぐる人間関係により構成される。これらの内容の項目については、前プロジェクトにおけるフィールド研究（日中韓越をフィールド）を踏まえ、日中韓越の研究者による多声的協議を通して検討・設定が行われた。実施：日本、韓国、中国、ベトナムにて調査を実施した。小学5年生、中学2年生、高校2年生の子どもとその親を対象に、各群において親子ペアで120組の回収を見込んで配布数を設定し、質問紙調査を配布し、回収した。分析：現在は回収された質問紙調査の結果の分析段階にある。子どものお金をめぐる価値観意識および他者関係の捉え方と、親のそれらおよびお金をめぐる教育観の関係性について、日中韓越の比較をしながら、その文

化的特殊性を析出することを主眼として、分析を行っている。

結果の公表：分析結果については、今後順次、公表の予定である。まずは、「日本心理学会第74回大会」での学会発表を予定しており、「お金をめぐる規範の構造（1）：小中学生親子の善悪・許容度判断」、「お金をめぐる規範の構造（2）：親子関係・友だち関係の認識」、「お金をめぐる規範の構造（3）：親の教育観」、「お金をめぐる規範の構造（4）：親の人間関係」のテーマで分析を行い、論文集原稿の執筆を完了した。これにより、日本での調査結果について、次の点が明らかにされた。

（1）小中学生親子の善悪・許容度判断：善悪・許容度判断における親子の関係性に関する相関係数による分析では両者に大きな関係があるとは言えなかったが、親子ともに小学生から中学生にかけて善悪・許容度の意識が緩やかな方へと移行したことから考えると、間接的に何らかの関係性があることが示唆された。

（2）親子関係・友だち関係の認識：親子関係・友だち関係の認識における親子の意識の関係は小さかった。一方、友だち関係および親子関係の小学生から高校生にかけての変化を親子別に検討した結果、親に関しては、子どもの友達関係についての期待が子どもの年齢によって異なることを示していると考えられ、子どもの方は、親子関係に関しては、親から与えられた金であっても自分のものと考える方向へ、友達関係においてはお金を関係の中に取り入れて融通させることに対して許容的な方向に変化することが見出された。

（3）親の教育観：親の教育観に関する回答傾向は、6因子（「計画的に使う」「友達のために使う」「他人と合わせて使う」「プレゼントに使う」「お金を増やす」「自分用に使う」）に分かれた。いずれの因子も、小中間の差はなく、日本の親はお金と関連して子どもに身につけてほしいと期待される内容は、小学生と中学生に対して差がなく一貫していることが明らかにされた。

（4）親の人間関係：親は親の人間関係、なかでも父母どちらかのきょうだいの子ども（当人からみると甥・姪）に対してお金をあげた経験が最も高く（77%）、次いで、親の親戚の子ども（45%）、親の友達の子どもの（23%）であり、親の人間関係以外のチャネルでお金をあげる親（勤務関係、子どもの交友関係）は1割程度であった。親は自分の子ども以外に対しては、新年および新入学（進級）という機会に、自身の人間関係の濃さ（特に血族）というチャネルに応じてお金をあげていることが明らかにされた。

以上、明らかにされた日本の現象につい

で中国、韓国、ベトナムとの比較を通して、その文化的特殊性を明らかにするとともに、他の三か国についての理解を深めていく予定である。

【インタビュー】

インタビュー調査では先行プロジェクトに於いて子どもの「奢り」評価を巡る著しい文化差など、興味深い現象が確認されていたが、そこで見いだされる「文化差」認識の生成過程、すなわちインタビュー現場に於けるインタビュアーとインタビュー어의やりとりの経過及びそれらのデータを巡る研究者間の文化的に多声的な議論の具体的展開が次の重要な研究課題であった。次項に説明するように、文化は予め固定的に実体的に存在するものではなく、主体間の相互作用の中にその都度立ち現れるものだという前提に立つ以上、我々の研究から見いだされた「文化」それ自体もまた生成の産物として動的に理解する必要があるからである。

注目すべき現象の一つは、「文化差を明らかにする」という目的で、「外国人研究者」からインタビューされる、という枠組みの中でインタビュアーが語ることと、インタビュイーが周囲の知人と語り合うことの間には微妙な違いが見いだされることである。後者に於いて、たとえば奢りについて、その否定的な側面も語るインタビュイーが、前者の文脈で奢りに否定的な評価をする日本人研究者に対しては、その積極面を強調して語るという強い傾向が見いだされる。このとき語りの主体は「私 VS あなた」の枠組みから「私達 VS あなたたち」という枠組みへと変容し、語りの場自体が共同性の差を理念化して強調し、相互の文化を構造化する性格を持つようになる。

これを呉宣児は「対の構造」と呼ぶが、質問紙調査結果を含むこれらのデータを素材として、大学の異文化理解の授業に於いて実践的にこのような「対の構造」を生み出し、そのことを前提として多声的な文化理解への展開を模索する実践的な活動も現在展開し、さらに新たな科研プロジェクトとして日中韓越で行われ始めている。

また上記の「同一文化内に於ける多声性（奢りへの複数の意味づけなど）」の問題は、個人の内部における多声的な意味づけのあり方の問題にもつながるものである。片は奢りなどの金銭媒介的な行為について、否定的な評価と肯定的な評価が同一インタビュイーの中にあるダイナミズムを持って構造化されている様を分析し、そのような規範性を持った多声的な文化的自我のあり方を「両義性」の概念で記述分析する。この両義性はインタビュアーによってマスターナラティブが意図的に揺るがせられることによっても

見いだされるし、親子によるお小遣いについての会話の中からも見いだされ、さらには語り方の発達のな変化の中からも明らかになるものである。

この自他関係の構造化に根源を持つ両義的な自我の形成の問題は、親子といった自他関係に限定して考察されるべきものではなく、さらに親戚や近所の人々、友人などを含む自他関係の構造化の問題へと広がりを持って分析される課題となる。現在この面でのさらなるデータ分析とその理論化が進行中である。

沖縄についてはたとえば宮古島のように、人間関係が非常に濃密で、韓国や中国の人間関係を思い起こさせるような場であっても、学校では「奢りはいけないことだ」という教育が行われ、金銭媒介的な友人関係への強い警戒感、否定的な評価が行われていることが確認された。興味深いのは、そのような教育をこく当たり前のこととして行っている島出身の教師自身、子どもの頃はそれほど否定的な評価を持っていなかったことである。文化変容の問題を考えるとにもさらに追求すべき問題が見えてきていると思われる。

【理論】

「差の文化心理学」は文化というものが、外延（成員の範囲、地域的な分布の境界など）も内包（弁別の基準、意味づけ内容など）も明瞭に定義することが困難で、時代的な変遷も激しく、さらには同時代に於いても視点の置き方によって同一対象が複数の文化に帰属されるような、きわめて大きな曖昧さを持つ、ということ、その「本質的な属性」であると考える。

この「本質」を見失うことなく文化を心理学的に分析するため、「差の文化心理学」では文化を個の活動の外部にある社会的な固定的実体として理解することを回避しようとする。またそれを個の内部の固定的な認識パターンとして心理的な実体として理解することも回避する。さらに個と社会（文化）の間に相互構成的な関係を想定する、という解法もとらない。

これに変わって「差の文化心理学」が問題とするのは「その都度の相互作用の中に、相互作用する両者を等しく規定する（両者に共有された）共同性を持つ規範的媒介項の実践的な差異認識」として文化を共同主観的存在として理解する立場を取る。定義上、それは個にも社会にも還元されず、さらには両者の間に相互規定的関係が想定されることもない。個を越えた文化的社会的な実体（文化の存在論）は、個別の主体間相互作用（文化の実践論）の中で、その都度の文脈に応じて共同主観的（文化の認識論）に生成されていくのである。

これらの文化的な相互作用構造はすでに

概念化されている拡張された媒介構造「EMS」モデル (Fig.4) によって表現可能である。それは、対象を媒介に相互作用する主体間を規定する形で規範的媒介項が生成されている関係を表すが、そこでその規範的媒介項が主体間でズレて現れ、さらにそのズレが認識主体にとって共同性の差として現れる時に文化が機能的な実体として共同主観的に立ち現れる、という形で説明されることになる。))

ではそのようなものとして措定された「本質的に曖昧な」文化を研究することは如何に可能か。上記の定義によるかぎり、文化はその都度の実践的な相互作用の中で、それをなんらかの(他の共同性と対比される)共同性のあり方として認識する行為の中に生み出されるものであるから、必然的にそれは対象を認識する文脈、主体が置かれた実践的文脈によって相対的なものである。さらにそこで対象者の持つ共同性がズレとして現れるのは、自らが無意識的に成立させてきた共同性とのズレとして立ち現れるのであるから、いかに直接の生活実践から離れて文化という対象を公共的に研究しようとする研究者であっても、この構造から離れて文化を「普遍客観的に」記述分析することは不可能である、ということが導き出される。

このため、「差の文化心理学」では、自らの文化性(共同性)と他者の文化性(共同性)との相対的な差の認識として文化を理解するという枠組みを、研究者の文化研究にも持ち込み、異なる文化的背景を持つ研究者間で相互に相手の文化性を対象として議論を展開するという、多声的な方法を採用。自らの文化性が他者の文化性によって相対化され、その相互的な相対化の過程で、両者の差異の文化的な意味を理解する共通する枠組み(公共的な文化認識枠組み)を模索するのである。

ただし、これも上記の定義から明らかなように、相互に相対化する研究者がそれぞれのような文化的背景を背負うものとして議論するかという、議論の文脈によって、同じ研究者が属する文化であってもその意味は異なって現れることになる。両者の間に現れた公共的な文化的認識は、それ自体がその両者による、という個別的な文脈から離れられない。

この文脈依存的な公共性を拡大するには、そこで形成された理解構造を、さらに次なる他者との議論に於いて相対化する、という手続を経て行われることになる。このようにして個別具体的な文脈に依存しつつ、相対化と公共化を一步ずつ進めることにより、文化認識の一般化の拡大を図る方法を「差の文化心理学」では「具体的一般化」として概念化し、旧来の「誰から見ても同一の対象」としての普遍客観的な文化を想定した「客観的一般

化」の可能性を前提としない。

このように「差の文化心理学」における文化研究は、(研究者を含む)相互の共同性を対話的に相対化する過程を必然的な契機として含む、永遠に持続展開する対話実践的研究活動として位置づけられることになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

竹尾 和子・高橋 登・山本登志哉・サトウタツヤ・片 成男・呉 宣児、お金の文化的媒介機能から捉えた親子関係の発達的变化、発達心理学研究、20巻、査読有り、2009、406-418

呉宣児・サトウタツヤ・高橋登・山本登志哉・竹尾和子・片成男、インタビューにおける<声>と<文化>「多声性」と「対の構造」に焦点を当てて、共愛学園前橋国際大学論集、査読有り、No.8、2008、235-245頁

Pian, C., Yamamoto, T., Takahashi, N. Oh, S., Takeo, K., Sato, T.、Understanding Children's Cognition about Pocket Money from Mutual- subjectivity Perspective、Memoirs of Osaka Kyoiku University. IV、Education, pshychology, special education and culture Vol.55, (1)、査読無し、2006、109-127

呉宣児・山本登志哉・片成男・高橋登・サトウタツヤ・竹尾和子、異文化理解における多声性の方法(マルチボイスメソッド): 子ども同士のおごり合い現象をどう見るかに焦点を当てて、共愛学園前橋国際大学論集、査読有り、6、2006、91-102

[学会発表](計29件)

高橋登・竹尾和子・呉宣児・高橋恵子、お金という文化的道具の獲得過程から見た「大人になること」、第21回日本発達心理学会大会発表論文集、2010、神戸国際会議場

サトウタツヤ・高橋登・高田明・中村和夫、「差の文化心理学」と「生成の文化心理学」、第21回日本発達心理学会大会発表論文集、2010、神戸国際会議場

竹尾和子、山本登志哉、高橋登、サトウタツヤ、呉宣児、片成男、韓国におけるお金をめぐる子どもの生活世界; ソウルと済州島(1) お小遣いのもらい方、第50回日本教育心理学会総会発表論文集、2008 東京学芸大学

山本登志哉、高橋登、サトウタツヤ、呉宣児、片成男、竹尾和子、韓国におけるお金をめぐる子どもの生活世界; ソウルと済州島

(2) 親子関係・友達関係とお金、第 50 回
日本教育心理学会総会発表論文集 2008 東
京学芸大学

Noboru Takahashi、Money for East Asian
Children: Cultural Differences and/or
Dialogically Generated Meanings、Second
ISCAR Congress、2008、UCSD

Toshiya Yamamoto、Socio-cultural norms
emerged in interactions and expanded
mediational structure A theoretical
viewpoint for analyzing micro-genesis of
culture、Second ISCAR Congress、2008、UCSD

Chengnan Pian、Cultural Meanings of
Money are NOT Fixed Ambiguity and
Fluctuation about the Cognition of Pocket
Money in Chinese Korean Children、Second
ISCAR Congress、2008、UCSD

Seon-Ah Oh、Cultural Differences and
Different Voices Appearing in Interviews
Peer Relationship Based on “Ogori”
(Treating) in Korea and “Warikan” (Going
Dutch) in Japan、Second ISCAR Congress、
2008、UCSD

Noboru Takahashi、East Asian children
and their pocket money Development as
negotiation of the cultural norm
boundaries、29th International Congress of
Psychology、2008、Berlin

Noboru Takahashi、Money as a cultural
tool and east asian children Toward a
cultural theory of children's social
development、29th International Congress
of Psychology、2008、Berlin

他 19 件

〔図書〕(計 2 件)

サトウタツヤ(編)、TEMではじめる質
的研究：時間とプロセスを扱う研究をめざし
て、2009、誠信心書房

Yamamoto, T., & Takahashi, N.、Money as
a Cultural Tool Mediating Personal
Relationships: Child Development of
Exchange and Possession、In Cambridge
Handbook of Sociocultural Psychology、
2007、508-523

〔その他〕

ホームページ等

[http://homepage2.nifty.com/ToYamamoto/M
&C/MandCframe.htm](http://homepage2.nifty.com/ToYamamoto/M&C/MandCframe.htm)

受賞(朱智賢心理学賞)

Yamamoto & Takahashi(2007)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 登志哉(YAMAMOTO TOSHIYA)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：60221660

(2) 研究分担者

高橋 登(Takahashi Noboru)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00188038

サトウ タツヤ(Sato Tatsuya)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：90215806

呉 宣兇(Oh Seonah)

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・准
教授

研究者番号：90363308

竹尾 和子(Takeo Kazuko)

東京理科大学・理学部・講師

研究者番号：30366421

伊藤哲司(Ito Tetsuji)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：70250975